

# 学部における心理学専門教育の 導入に関する一研究（4）

～不思議現象信奉傾向と心理学に対するイメージとの関連～

芳 賀 康 朗<sup>1) 2)</sup>

〈要旨〉本研究では、心理学初学者を対象として、不思議現象に対する信奉傾向、心理学に対して抱いているイメージ、そして批判的思考の態度との3者間の相関関係を検討することを目的とした。心理学の初学者210名を対象とした質問紙調査を行なった結果、不思議現象に対する信奉傾向は批判的思考態度とは独立した認知スタイルである可能性が示された。心理学に対するイメージの下位因子である「実証科学」因子と不思議現象信奉傾向、および批判的思考態度との間にも有意な相関は認められなかった。これらの結果から、心理学学習前の段階で、心理学は実証科学であり、心理学研究において批判的思考態度が必要とされることが十分に認識されていない可能性が示唆された。

〈キーワード〉心理学のイメージ、不思議現象、批判的思考態度

## 1. はじめに

1990年代終盤から2000年代にかけて日本の大学では、「心理学部」や「心理学科」が雨後の筍のように急増した。酒井（2017）によれば、学部名称に「心理」を含む学部は2000年度にはじめて設置され、2016年度までに25にまで増加した。また、学科名称に「心理」を含む学科は、2000年度から2010年度までに133も増加した。いじめ、高齢化、心の健康支援などの社会的問題の解決が迫られたことに加え、マスメディアやインターネットで心理学「的」話題や脳科学「的」話題がおもしろおかしく取り上げられたことも、学部・学科の急増に間接的に手を貸したことは否定できない。

心理学の研究対象は、いうまでもなく「心」である。心はわれわれにとって最も身近な関心事のひとつである。しかし、心は捉えどころのない不確かな存在であり、客観的に観察、測定、理解することが難しい。それゆえ、心に対して抱くイメージは千差万別であり、目に見えないミステリアスな特徴は我々を魅了する。特に、アイデンティティの確立や新しい人間関係の形成が要求される青年期の大学生は、自分の心はもちろん、他者の心に対しても敏感である。また他の発達段階と比較しても心のトラブルに遭遇する機会が多く、否応なく心と向き合わざるを得ない。さらに、そのようなトラブルを解決するつもりで、怪しげな集団や胡散臭い情報に近づいて失敗するケースも少なくない。

芳賀・川島・望木（2017）は、大学生が抱いている心理学のイメージを検討するために、心理学の初学者と心理学の受講経験がある学生を対象とした調査を行なった。その結果、心理学に対するイメージは「役立ち」因子、「実証科学」因子、「似非科学」の3因子から構成されていることが確認された。「役立ち」因子は、自己理解、他者理解、人付き合いなどに対する心理学の有用性と関連する項目から構成されていた。「実証科学」因子は、実験や統計処理といった心理学の実証科学的側面に関連する項目で構成されていた。そして、「似非科学」因子は、心理学に対する通俗的（占いやオカルトと関係がある）かつ非科学的（胡散臭い・怪しい）な印象と関連する項目で構成されていた。さらに、大学での受講経験によって心理学の実証科学的特徴に対する理解は深

まるものの、心理学の有用性に対する疑念や失望感は高まっていくことが確認された。こうした疑念や失望感が生じる原因として、心理学に対して過剰な期待や誤ったイメージが受講前に形成されていることがあげられる。そして、誤ったイメージが形成される背景には、占いや心霊現象などの不思議現象（paranormal phenomenon）と心理学との親和性の高さがあると考えられる。

不思議現象とは、超能力、宇宙人、霊体験、血液型性格占いのように、現在の科学ではその存在や効果が立証されていないが、人々に信じられていることのある現象を指す（菊池, 1998）。心理学学習前の大学生を対象に、心理学という言葉から連想するイメージを尋ねた芳賀・川島（2016）の調査でも、マインド・コントロール、催眠術、メンタリズム、相性診断といった疑似科学（pseudo-science）の用語が数多く報告された。目に見えない心を研究対象とする心理学が、不思議現象や疑似科学と結びつきやすいことは仕方ないことかもしれない。しかし、科学的方法論を無視し、メディアに流布する情報を鵜呑みにする姿勢は、心理学研究とは相容れない。また、心理学が不思議現象を扱う学問であると誤解することは、大学での学習を妨げ、前述した失望感を高めることにつながる恐れもある。

そこで本研究では、心理学初学者を対象として、不思議現象に対する信奉傾向と心理学に対するイメージとの相関関係を分析することを目的とする。不思議現象に対する信奉傾向を測定する心理尺度には、中島・佐藤・渡邊（1993）が開発した「日本版・超自然現象信奉尺度（Paranormal Belief Scale for Japanese）」などがある。しかし、本研究では現代の大学生にとって身近な不思議現象に対する信奉傾向を測定するために、予備調査で代表的な不思議現象を30項目選定し、それらの現象に対する信奉傾向を得点化して利用した。

さらに、身の回りの諸現象を客観的に捉え、論理的・多面的に評価し、判断する批判的思考（critical thinking）の態度と不思議現象信奉傾向、および心理学に対する素朴イメージとの関連についても検討する。批判的思考は、実証科学としての心理学に取り組むには不可欠な思考方法である。批判的思考態度が十分に身につけているならば、不思議現象に対する信奉傾向は相対的に弱く、心理学を実証科学としての認識している程度が高いことが予想される。

## 2. 予備調査

### 目的

本調査において調査対象者の不思議現象に対する信奉傾向を測定するために、既知性が高く、信奉傾向も強いと思われる不思議現象を30項目選定することを目的として、予備調査を行った。

### 方法

調査協力者 三重県のK大学で心理学の専門科目講義を受講している大学1・2年生143名（男性100名、女性43名）。平均年齢は19.1歳であった。

調査方法 調査は筆者が担当する授業時間中に実施した。調査協力者にA4用紙4枚からなる質問紙（フェイスシート1枚を含む）を配布し、調査目的を説明した上で約15分間回答時間をとった。回答に際して、すべての質問に回答する義務はないこと、回答結果の匿名性は守られること、調査目的以外に回答結果が使用されることはないことを説明した。回答済みの質問紙はその場ですべて回収された。

調査内容 調査協力者の属性（性、年齢、学年）を尋ねる質問と、不思議現象に対する信奉傾向を評価させる多肢選択式の質問から構成された。評価対象とした不思議現象は、中島・佐藤・渡邊（1993）の研究、筆者らが予め実施した学生へのインタビュー、インターネット情報などを参考にして100項目選びだし、10から25文字程度の簡潔な日本語表現に整えて準備した。調査協力者には各項目についての信奉傾向を6件法尺度（「とても信じている（6点）」、「どちらかといえば信じている（5点）」、「どちらともいえない（4点）」、「どちらかといえば信じていない（3点）」、「まったく信じていない（2点）」、「そもそも知らない（1点）」）によって評定させた。

### 結果

100項目の不思議現象のうち、「そもそも知らない」という回答数が全調査協力者の1割を超えた26項目を除外し、残った73項目の中から平均評定値の高

かった項目を30項目抽出した（表1）。中島・佐藤・渡邊（1993）は、大学生を対象とした超自然現象に対する信奉傾向を測定し、超自然現象を「迷信」、「霊」、「超能力」、「超生命・超文明」の4カテゴリに分類している。今回の予備調査で抽出された30項目もほぼこれらのカテゴリのいずれかに該当するものと考えられる。しかし、「パワースポット」、「コラーゲン」、「ゲーム脳」、「マイナスイオン」といった表現は、21世紀になって登場または流行した比較的新しいものであり、現代の大学生においてなじみ深い不思議現象を表すキーワードと考えることもできる。

表1 予備調査で抽出された不思議現象と平均評定値

不思議現象	平均評定値
お守りには効力がある	4.704
他の惑星にも生命が存在する	4.698
おみくじで大吉が出るといいことが起きる気がする	4.688
悪さをするとバチが当たる	4.683
神社には神様がいる	4.648
宇宙人は存在する	4.539
正夢は本当にある	4.532
靈感のある人には幽霊が見える	4.514
骨を鳴らすと指が太くなる	4.500
四つ葉のクローバーは幸運をもたらす	4.415
パワースポットには不思議な力がある	4.376
崇りや呪いは存在する	4.366
天国や地獄は存在する	4.282
催眠術は存在する	4.246
心霊スポットには幽霊が出ることがある	4.241
UFO（未確認飛行物体）は存在する	4.234
守護霊は存在する	4.218
悪いことをすると地獄に落ちる	4.142
名前には力がある	4.135
女性は男性に比べ手先が器用である	4.092
お賽銭で5円を入れるとご縁がある	4.092
茶柱がたつと幸運がある	4.049
コラーゲンを飲むと肌がツルツルになる	4.021
幽霊は人間に憑りつく	4.014
お賽銭をあげると御利益がある	4.012
テレパシーは存在する。	3.930
ため息をつくと幸せが逃げる	3.923
運命には逆らえない	3.901
ゲームをやりすぎるとゲーム脳になる	3.894
マイナスイオンは健康にいい	3.879



### 3. 本調査

#### 目的

予備調査で選定した30項目の不思議現象に対する信奉傾向の強さと、批判的思考態度および心理学に対するイメージとの相関関係を分析することを目的として、質問紙調査を行った。

#### 方法

調査協力者 三重県のK大学で心理学の入門的講義を受講した大学1・2年生210名（男性134名、女性76名）。平均年齢は19.5歳であった。

調査方法 調査は筆者が担当する授業時間中に実施した。調査協力者にA3用紙3枚からなる質問紙（フェイスシート1枚を含む）を配布し、調査目的を説明した上で約20分間回答時間をとった。回答に際して、すべての質問に回答する義務はないこと、回答結果の匿名性は守られること、調査目的以外に回答結果が使用されることはないことを説明した。回答済みの質問紙はその場ですべて回収された。

調査内容 調査協力者の属性（性、年齢、学年）、不思議現象信奉傾向、批判的思考態度、および心理学に対するイメージを尋ねる質問から構成された。①不思議現象信奉傾向：予備調査で選定した30項目の不思議現象に対する信奉傾向について、「信じている（5点）」から「信じていない（1点）」までの5件法で回答を求めた。②批判的思考態度：「批判的思考態度尺度」（平山・楠見, 2004）を用いて、その下位尺度である「論理的思考への自覚」（“複雑な問題について順序立てて考えることが得意だ”など13項目）、「探究心」（“いろいろな考え方の人に接して多くのことを学びたい”など10項目）、「客観性」（“いつも偏りのない判断をしようとする”など7項目）、「証拠の重視」（“結論を下す場合には、確たる証拠の有無にこだわる”など3項目）の4因子33項目について、「とてもよくあてはまる（5点）」から「まったくあてはまらない（1点）」の5件法で回答を求めた。③心理学に対するイメージ：芳賀・川島（2016, 2017）および芳賀・川島・望木（2017）で示された、大学生が心理学に対して抱いているイメージを構成する3因子21項目（表2）の記述について、「とて

もそう思う（5点）」から「まったくそう思わない（1点）」までの5件法で評定を求めた。

表2 心理学に対するイメージの3因子（芳賀・川島・望木, 2017）

因子	項目
役立ち因子	人付き合いに役立つ 自分の悩みを解決することに役立つ 他者の心を理解することに役立つ 自分が変わることに役立つ 他者の悩みを解決することに役立つ たのしそう・おもしろそう 自分の心を理解することに役立つ 癒しを与えてくれる 将来の仕事に役立つ カウンセリングを行う 優しそう
実証科学因子	理系の学問である 数学や統計学が必要とされる 科学的である 実験を行う レポートや宿題がたくさんある アンケート調査を行う
似非科学因子	非科学的である うさんくさそう・あやしそう 他者の行動をあやつることに役立つ 占いやオカルトと関係がある

## 結果

不思議現象信奉傾向得点の性差を確認するために、男性134名と女性76名の平均点を算出した。男性の平均点は101.69点、女性の平均点は108.80点であり、 $t$ 検定を行った結果、5%水準で有意差が認められた ( $t(208)=2.33, p<.05$ )。この結果から、女性の不思議現象信奉傾向が男性よりも有意に高かったことが確認された。

30項目の不思議現象に対する信奉傾向の合計点と批判的思考態度尺度の下位4因子の合計得点との相関を分析した結果、「論理的思考への自覚 ( $r = -.080$ )」、「探究心 ( $r = .157$ )」、「客観性 ( $r = .057$ )」、「証拠の重視 ( $r = -.028$ )」のいずれの因子との相関も有意ではなかった。この結果は、6因子からなる「不思議現象に対する態度尺度 (APPlE)」を用いて、本研究と同じ批判的態

度尺度得点との相関を検討した坂田・小城・川上（2007）の研究と同様の結果であった。しかし、男女別に再分析を行ったところ、不思議現象信奉傾向と「証拠の重視」因子との相関において、性差が認められた（男性： $r = -.086$ , 女性： $r = .215$ ）。この結果は、女性のほうが不思議現象信奉傾向と証拠に基づいた合理的な判断を行おうとする傾向との正の相関が相対的に強い可能性を示唆している。

次に、不思議現象信奉傾向の合計点と心理学に対するイメージの下位3因子の各合計得点との相関を分析したところ、「役立ち」因子（ $r = .492, p < .01$ ）、および「似非科学」因子（ $r = .364, p < .01$ ）との間に有意な正の相関が認められた。しかし、「実証科学」因子との相関は有意ではなかった（ $r = .155$ ）。この結果からは、不思議現象信奉傾向が高い人ほど、心理学は役に立つと考えている一方で、似非科学的な傾向も強いと捉えていることが推測される。これらの相関傾向についても男女別に再分析を行った結果、不思議現象信奉傾向と「役立ち」因子との相関において、女性（ $r = .420$ ）よりも男性（ $r = .509$ ）における相関のほうが強く、不思議現象信奉傾向と「似非科学」因子との相関においても、女性（ $r = .188$ ）よりも男性（ $r = .469$ ）における相関のほうが強いことが示された。

さらに、批判的思考態度尺度の下位4因子の各合計得点と心理学に対するイメージの下位3因子の各合計得点との相関係数を算出し、表3に示した。顕著な相関関係はいずれの下位因子の組合せにおいても確認できず、わずかに批判的思考態度尺度の「探究心」因子と心理学に対するイメージの「役立ち」因子の間に有意な正の相関が認められたのみだった（ $r = .330, p < .01$ ）。

表3 批判的思考態度尺度と心理学に対するイメージとの相関

		批判的思考態度尺度			
		論理的思考 への自覚	探究心	客観性	証拠の重視
役立ち		.031	<b>.330</b>	.237	.126
心理学に対するイメージ	実証科学	-.098	.112	-.025	-.053
	似非科学	.170	.164	.067	-.024



最後に、不思議現象信奉傾向得点が極端に高い者と極端に低い者を比較し、批判的思考態度と心理学に対するイメージにおける差異を検討する分析を行った。全調査協力者の不思議傾向信奉得点の平均点（104.22）から1標準偏差（±21.68）以上離れた得点の調査協力者を抽出し、得点の高かった35名（男性19名、女性16名）を信奉度高群、得点の低かった25名（男性22名、女性3名）を信奉度低群とした。

図1には、批判的思考態度尺度の4つの下位尺度別に2群の平均得点を示した。t検定を行った結果、「探究心」因子の平均得点における群差のみが有意傾向であった（ $t(58)=1.89, p<.10$ ）。この結果は、不思議現象信奉傾向が極端に高い者は、さまざまな知識や情報を求めようとする傾向も高いことを示唆している。図2には、心理学に対するイメージの3つの下位尺度別に2群の平均得点を示した。t検定を行った結果、「役立ち」因子の平均得点（ $t(58)=5.31, p<.01$ ）と「似非科学」因子の平均得点（ $t(58)=4.35, p<.01$ ）における群差が有意であった。この結果は、前述の相関分析の結果と一貫性のあるものといえる。

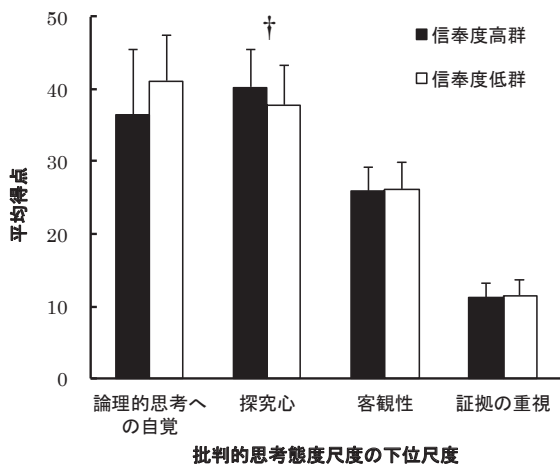


図1 信奉度高群(n=35)と低群(n=25)の批判的思考態度尺度の下位尺度得点の比較

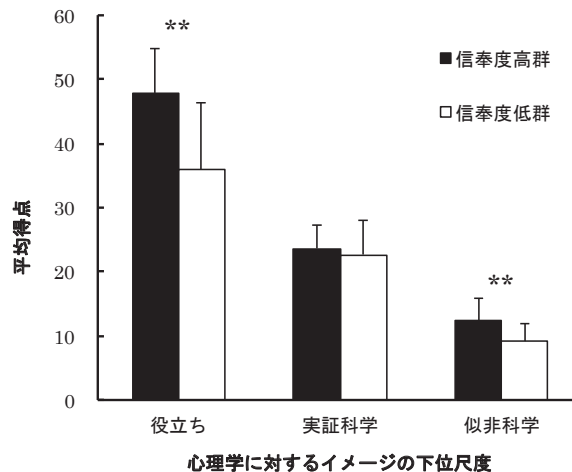


図2 信奉度高群(n=35)と低群(n=25)の心理学に対するイメージの下位尺度得点の比較

#### 4. 考察とまとめ

不思議現象に対する信奉傾向と批判的思考態度尺度の下位4因子との相関関係を分析した結果、「論理的思考への自覚」、「探究心」、「客観性」の3因子それぞれとの間に顕著な正の相関は認められなかった。また、「証拠の重視」因

子に関しては、女子学生においてのみ弱い正の相関が認められた。不思議現象に対する信奉傾向と、証拠に基づいた合理的な判断を行おうとする傾向とは矛盾する認知傾向であるように思われる。しかし、そもそも不思議現象に対する信奉傾向と批判的思考態度とは独立しており、大学で学問としての心理学に触れる前の段階では、不思議現象を批判的な立場から分析し理解するスキルや経験が十分ではないことを示唆しているとも考えられる。

松井（2000）や小城・坂田・川上（2010）は、大学での学習経験によって心理学に対する非科学的なイメージが払拭され、不思議現象に対しても批判的な立場から思考できるようになることを報告している。大学で心理学を学び始めた段階で、身近な不思議現象と学問として心理学との関係について正しい情報を与え、心理学が科学的かつ批判的な態度から心理現象を見つめる学問であるとの認識を形成させることが専門教育のスタートにおいて不可欠な作業といえるだろう。さらに、高校生を対象としたオープンキャンパスや出張授業の機会に実験や質問紙調査などの心理測定を経験させることも、心理学の実像を知ってもらうよい機会になると考えられる。

不思議現象信奉傾向と心理学に対するイメージの下位3因子との相関分析の結果、「役立ち」因子、および「似非科学」因子との間に有意な正の相関が認められた。「役立ち」因子と「似非科学」因子に対する評定が高いことが心理学初学者の特徴であることは、すでに芳賀・川島・望木（2017）の研究で確認されている。これらの結果から、心理学初学者は、心理学は悩み解決や人間関係形成に役立つ学問であると考えている一方、不思議現象と関係深く、非科学的な要素も多分に含んだ学問であると認識していることが推測される。心理学を科学として認識してもらい、その方法論を理解してもらうことは心理学教育において欠くことはできない。しかし、芳賀・川島（2016）と芳賀・川島・望木（2017）の研究では、学習経験を通じて、心理学の有用性に対する疑念や失望感が高まることが報告されており、安直に「科学としての」心理学を初学者に押しつけることにも問題は残る。

本研究では、不思議現象信奉傾向と「役立ち」因子、および「似非科学」因子との相関は男性において顕著であることも示された。性差の問題について

は、学習意欲や大学への進学目的などの観点から今後分析を行っていきたい。さらに、外的統制感（川上・小城・坂田, 2006）、大学生活に対する漠然とした不安感（川上・小城・坂田, 2013）、空想傾向（川上・小城・坂田, 2014）などの個人特性と不思議現象信奉傾向との相関も報告されている。これらの個人的特性は、心理学の学びを志向する傾向とも十分に関連していると考えられる。個人的特性、不思議現象信奉傾向、心理学に対するイメージの3者間の相関についても検討する必要があるだろう。

批判的思考態度尺度の4因子と心理学に対するイメージの3因子との相関分析では、批判的思考態度尺度の「探究心」因子と心理学に対するイメージの「役立ち」因子の間に正の相関が認められたのみであった。この結果から、批判的思考態度は心理学に対して初学者が抱くイメージともほぼ独立であったといえる。批判的思考態度と不思議現象信奉傾向との間に顕著な相関が確認できなかったことと併せて考えると、大学入学時には、心理学が実証科学であること、そして心理学研究において批判的思考態度が必要とされることが十分に認識されていない可能性が示唆される。その一方で、不思議現象信奉傾向と心理学に対するイメージの「似非科学」因子との間には正の相関が認められたことから、「心理学は不思議現象を研究する学問」といったイメージが学習前に形成されている可能性も考えられる。

21世紀初頭の心理学ブーム以来、インターネット、テレビ、進学情報誌などでは心理「学」に関する大量の情報が垂れ流されている。その中には、偏向した情報や誤解を招きやすい情報も数多く含まれている。そのような情報を鵜呑みにした結果、「心理学は不思議なことを勉強する」学問であるとの誤ったイメージが形成されるのかもしれない。また、高等学校における進路選択場面で登場する「文系・理系」といった前時代的な2者択一的な学問区分が、「心理学は文系の学問」、「心理学は科学ではない」、「理系のように数学は必要ない」といった素朴かつ誤った心理学観を刷り込んでしまうのかもしれない。

心理学は実証科学であり、それに取り組むためには適切なリテラシーと思考様式が必要とされる。しかし、心理学の研究対象は日々経験する「あるある」現象であることが多い。こうしたギャップを埋めるための情報提供やトレーニ

ングをできるだけ早い時期から行うことが、心理学に対する疑念や失望を回避することに役立つのではないだろうか。

## 引用文献

- 芳賀康朗（2018）. 不思議現象信奉傾向と心理学に対するイメージとの関連 第67回東海心理学会大会発表論文集, 20.
- 芳賀康朗・川島一晃（2017）. 学部における心理学専門教育の導入に関する一研究 第66回東海心理学会大会発表論文集, 25.
- 芳賀康朗・川島一晃（2016）. 学部における心理学専門教育の導入に関する一研究 皇學館大学紀要, 54, 33-54.
- 芳賀康朗・川島一晃・望木郁代（2017）. 学部における心理学専門教育の導入に関する一研究（２）～学習経験が心理学に対するイメージの変容に及ぼす影響～ 皇學館大学紀要, 55, 95-115.
- 川上正浩・小城英子・坂田浩之（2006）. 不思議現象に対する態度（４）－不思議現象に対する態度と Locus of Control の関係－ 日本心理学会第70回大会発表論文集, 133.
- 川上正浩・小城英子・坂田浩之（2013）. 不思議現象に対する態度と大学生活不安との関連 不思議現象に対する態度（35） 日本心理学会第78回大会発表論文集, 253.
- 川上正浩・小城英子・坂田浩之（2014）. 不思議現象に対する態度と空想傾向との関連 不思議現象に対する態度（44） 日本心理学会第78回大会発表論文集, 124.
- 平山るみ・楠見孝（2004）. 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響 教育心理学研究, 52, 186-198.
- 中島定彦・佐藤達哉・渡邊芳之（1993）. 超自然現象信奉尺度の作成 *Journal of the JAPAN SKEPTICS*, 2, 69-80.
- 小城英子・坂田浩之・川上正浩（2010）. 不思議現象に対する態度における心理学教育の効果 日本心理学会第74回大会発表論文集, 101.

松井三枝（2000）. はじめて学ぶ「心理学」に対するイメージの変化 - 「心の科学」受講前後の調査から - 富山医科薬科大学一般教育研究紀要, 23, 63-68.

酒井宏明（2017）. 「心理」学部・学科の急増とその制度的背景 高等教育行政との関連において 第90回日本社会学会大会研究報告要旨.

坂田浩之・小城英子・川上正浩（2007）. 不思議現象に対する態度と批判的思考との関連 不思議現象に対する態度（7）日本心理学会第71回大会発表論文集, 133.

<sup>1)</sup> 本研究は、東海心理学会第67回大会で口頭発表した芳賀（2018）の研究に加筆・修正を加えたものである。

<sup>2)</sup> 本研究におけるデータ収集とデータ分析には、コミュニケーション学科平成29年度卒業生の大森智貴さんにご協力いただきました。心から御礼申し上げます。



A Study on the introduction of psychology curriculum into undergraduate education (4).

Relations between attitudes towards paranormal phenomena, image for psychology, and critical thinking disposition.

Yasuaki Haga

#### Abstract

This study aimed to investigate how attitudes towards paranormal phenomena in novice students of psychology correlate with their image for psychology (three factors: “usefulness”, “empirical science”, and “pseudo science”), and with their critical thinking disposition (four factors: “awareness for logical thinking”, “inquiry-mind”, “objectiveness”, and “evidence-based judgment”). The results of questionnaire survey of 210 novice students showed that correlation between attitudes towards paranormal phenomena and critical thinking disposition was not significant. Evaluation on “empirical science” factor in image for psychology was significantly correlates neither with attitudes towards paranormal phenomena nor with critical thinking disposition. These results suggest that novice students of psychology may not recognize psychology as empirical science and that they do not understand that critical thinking is needed for psychological research at university.

Keywords : image for psychology, paranormal phenomenon, critical thinking disposition